



ベル・エポックのフランス、
印象派の“末裔”が描いた光と詩情

シダネルとマルタン展

-最後の印象派、二大巨匠-

2022.3/26 sat. ▶ 6/26 sun.



SOMPO美術館
Sompo Museum of Art

Press Release

シダネルとマルタン展

-最後の印象派、二大巨匠-



19世紀末から20世紀初頭のフランスで活躍した画家、アンリ・ル・シダネルとアンリ・マルタンに焦点をあてた、国内初の展覧会です。印象派を継承しながら、新印象主義、象徴主義など同時代の表現技法を吸収して独自の画風を確立した二人は、幻想的な主題、牧歌的な風景、身近な人々やその生活の情景を、親密な情感を込めて描きました。「最後の印象派」と言われる世代の中心的存在であった二人は、1900年に新協会(ソシエテ・ヌーヴェル)を設立、円熟期には共にフランス学士院会員に選出されるなど、当時のパリ画壇の中核にいました。

二人は深い友情で結ばれ同じ芸術観を共有しながらも、それぞれの活動拠点に由来して、異なる光の表現を追求します。シダネルは北フランスに特有の霞がかかった柔らかな光を、マルタンは南仏の眩い光を描き出しました。本展では、世紀末からモダニズムへ至るベル・エポック期に、独自の絵画世界を展開した二人の道のを、約70点の油彩・素描・版画を通して辿ります。

国内初の二人展

「最後の印象派」の二大巨匠、シダネルとマルタンに焦点を当てた日本で初めての展覧会です。印象派を継承し、穏やかで神秘的な光の表現を展開した二人の足跡を、油彩を中心とする約70点を通して辿ります。

印象派の“末裔”が描いた北と南、二つの光

フランス北部のダンケルクで10代を過ごしたシダネル、南仏トゥールーズ生まれのマルタン。パリでの修行後、再び北と南へ向かった二人が描いた光は、対照的で異なる性格を帯びています。北を拠点としたシダネルは、黄昏時や月明かりに浮かび上がる静謐な情景を、他方南のマルタンは、眩い陽光に照らし出される南仏風景を色鮮やかに描き出しました。

フランス近代絵画史の“もう一つの本流”

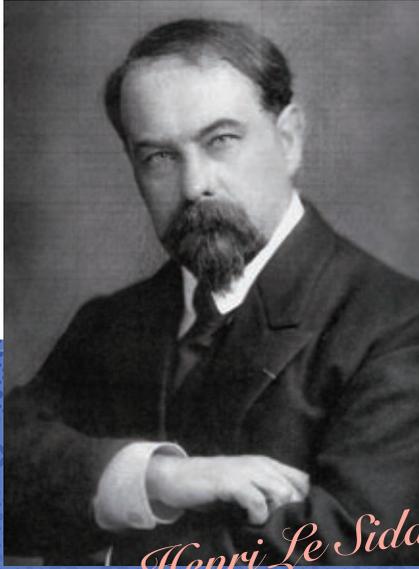
印象派以降、様々な「イズム」が登場したベル・エポック期のフランス美術界。私たちがよく知る、前衛画家たちによるフランス近代絵画史とは別の、“もうひとつの本流”を担った画家たちがいました。その代表格が、シダネルとマルタンです。穏やかな画風ゆえにこれまで前衛画家たちの影に隠れていましたが、近年、フランス本国を中心に再評価の機運が高まっています。

表紙: アンリ・ル・シダネル

《ジェルプロワ、テラスの食卓》

1930年 フランス、個人蔵 ©Luc Paris

©Yann Farinaux-Le Sidaner



Henri Le Sidaner

アンリ・ル・シダネル
(1862-1939)

インド洋モーリシャス島に生まれ、フランス北部のダンケルクで育つ。パリの国立美術学校でアレクサンドル・カバネルに学んだのち、エタプルやジェルブロワなど北部に移り、身近なものを情感豊かに描いた。「最後の印象派」の一人とされる。1887年から1893年まで出品していたフランス芸術家協会サロンで、1891年、マルタンと出会う。1894年に国民美術協会サロンに移り、1922年まで出品を続けながら、1900年にはマルタンと共に新協会(ソシエテ・ヌーヴェル、正式名称「画家彫刻家新協会」)の創設に加わり、中心的メンバーとして活躍する。1930年、フランス学士院会員に選出、1937年には会長に就任した。



アンリ・ル・シダネル
《ベルク、孤児たちの散策》

1888年 ダンケルク美術館 Inv. P.493 ©Emmanuel Watteau

©BNF Gallica. Domaine publique



Henri Martin

アンリ・マルタン
(1860-1943)

トゥールーズに生まれ、同地の美術学校で学んだのち、パリの国立美術学校でジャン＝ポール・ローランスに学ぶ。ラバステイド・デュ・ヴェールなど南仏各地を活動拠点とし、明るい陽光のもと風景や人物像を象徴主義的な雰囲気の中かに描いた。「最後の印象派」の一人とされる。大画面の装飾画にも優れ、パリの国務院をはじめとする多くの公共建築の壁画を手がけた。1881年から1939年までフランス芸術家協会サロンに出品するかたわら、1900年の新協会創設にも携わり、1922年まで出品を続ける。1917年にフランス学士院会員に選出され、のちに、シダネルの会員選出の後押しもした。



アンリ・マルタン
《ガブリエルと無花果の木[エルベクール医師邸の食堂の装飾画のための習作]》

1911年 フランス、個人蔵 ©Archives photographiques Maket Expert

北のシダネル、南のマルタン—二人が描いた、それぞれの光。

Chapitre

1

エタプルの アンリ・ル・シダネル

HENRI LE SIDANER A ETAPLES

ダンケルクから上京し、1882年に国立美術学校に入学したシダネルは、アカデミックな教育とパリの喧騒から距離を置くため、1885年から9年間、北部の寂れた港町エタプルに滞在、この地で北部特有の淡い光の表現を学びます。微妙に変化する光のニュアンスを的確に捉えながら、ジャン＝フランソワ・ミレーらレアリスムの画家の影響を受けて、孤児や羊飼いのいる感傷的な田舎の光景を描きました。エタプル滞在期に確立された画風によって、シダネルは次第に画壇の評価を得、入賞を果たした1891年のフランス芸術家協会サロンで、同じく出品していたマルタンと出会います。



a.

Chapitre

2

象徴主義

LE SYMBOLISME

19世紀末のヨーロッパを席卷した象徴主義の影響は、自らの様式を模索する1890年代のシダネルとマルタンの画面にも色濃く現れます。不安やメランコリーなど、観念的な世界を表現しようとするこの傾向に対し、二人は異なる反応を示しています。シダネルは、穏やかな光に満ちた静謐な雰囲気のある情景を、他方マルタンは、詩や文学に着想を得ながら、身近にいた女性をモデルに、より象徴性の強い華美な世界を描き出しました。



b.

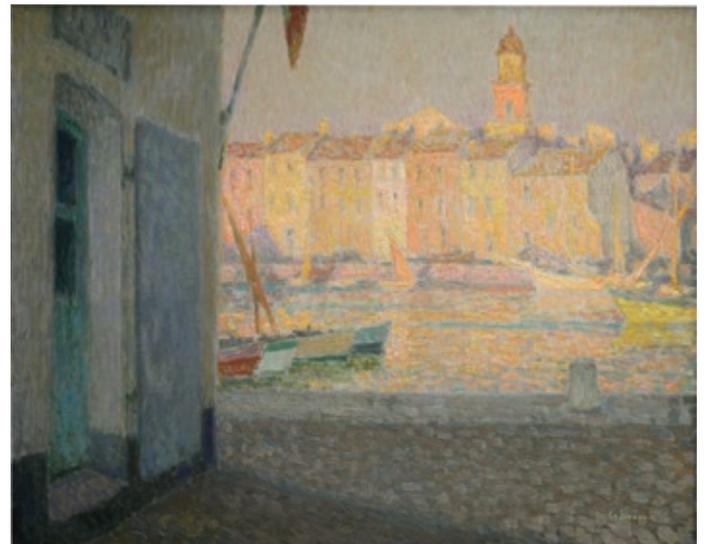
Chapitre

3

習作の旅

LES VOYAGES D'ETUDE

印象派をはじめとする19世紀の風景画家たちが各地を旅してその土地の風景を描いたように、彼らの末裔であるシダネルとマルタンも、各地でさまざまな情景を描いたあと、制作拠点に戻って大画面の完成作に仕上げました。シダネルは、フランス北部の沿岸地域、ブルターニュ地方、南仏の各地のほかに、イギリス、ベルギー、イタリアへも足を延ばし、他方のマルタンも、ほぼ毎年ヴェネツィアを訪れています。とりわけシダネルの画面からは、その土地の特徴的な景観を捉えながらも、夕暮れ時や月明かりなど、特定の時間帯の微妙な光の表現に関心を寄せていることがわかります。



c.

a. アンリ・ル・シダネル

《エタプル、砂地の上》 広報用貸出画像1

1888年 油彩/カンヴァス 46×60.5 cm フランス、個人蔵 ©Bonhams

エタプル滞在の成果として1888年のフランス芸術家協会サロンに出品し、好評を得た作品。草を食む羊のかたわらで、二人の若い羊飼いがしばし休息する光景が、沈みゆく太陽が放つ柔らかい光のなかに描き出されています。何気ない光景ですが、シダネル独自の神秘的な雰囲気に満たされています。

b. アンリ・マルタン

《腰掛ける少女》 広報用貸出画像2

1904年以前 油彩/カンヴァス 96.4×56.5 cm ランス美術館 Inv. 907.19.165 ©C. Devleeschauwer

世紀転換期以降のマルタンは、神秘的なテーマやモチーフから離れ、身近な人物を多く描くようになります。本作のモデルは農村の少女。背景に広がる丘と晴朗な夏の青空にはおよそ無関心な少女の表情は、帽子の下で影に沈んでいます。1890年代に色濃く現れていた象徴性は影を潜め、沈黙を考する少女の佇まいは、内向的な幻想性を宿しています。

c. アンリ・ル・シダネル

《サン＝トロペ、税関》 広報用貸出画像3

1928年 油彩/カンヴァス 73×92 cm フランス、個人蔵 ©Yves Le Sidaner

明け方の柔らかな光がサン＝トロペの港に差し込み、家々をオレンジ色に明るく照らし出しています。各地を旅し、様々な風景を見てきたシダネルですが、探し求めていた黎明時のわずかな光に感嘆する喜びを得たのは、南仏においてであった、と語っています。



アンリ・マルタンの 大装飾画のための習作

Chapitre 4

ETUDES POUR LES GRANDS DECORS
D'HENRI MARTIN

マルタンの画業のなかで重要な軸となるのが、30代前半から晩年に至るまで手がけた公共建築のための壁画の仕事でした。国からの注文によって制作された数々の壁画は、パリのみならず国内各地に残され、これらはマルタンが当時、大家としての地位と名声を確立していたことの証にほかなりません。なかでも国務院の壁画群は、壁画家としてのマルタンの仕事の集大成に位置付けられるでしょう。本章でご紹介する習作を通じて、画家の構想の跡を辿ると同時に、明るい陽光に照らされた光景を捉えるマルタンの確かな描写力を見ることができます。

Colonne 1 国務院「総会室」の壁画

パリ1区パレ・ロワイヤル内にある国務院は、行政と司法に関する国の諮問機関。おそらく1914年頃に政府から制作依頼を受けたマルタンは、中核的な一室「総会室」のために「勤労のフランス」というテーマの下、「農業」「商業」「産業」「知的労働」という4主題で、人々が働く姿を描いた。国民が主体となるフランス国家の理想的な姿への希求の念が込められていると解釈できるだろう。



d.

e.



ジェルブロワの アンリ・ル・シダネル

Chapitre 5

HENRI LE SIDANER A GERBEROY

1901年、シダネルは、パリから北へ100キロほどの場所に位置する小さな田舎の村、ジェルブロワを見出します。中世の要塞跡が残るこの小村に魅了されたシダネルは、1904年に家を購入、以後、本格的に活動拠点としました。穏やかな雰囲気のある村の景観や、バラが咲き誇る自邸とその庭を画題に、シダネルはそれらを情感豊かに描き出しました。この頃より、画の中から人の姿は消え、食事の支度が整えられた食卓や窓からこぼれる室内の灯によって人の存在を暗示する、シダネルの真骨頂とも言える作風が確立されていきます。

d. アンリ・マルタン

《二番草》 広報用貸出画像 4

1910年 油彩/板 69×100 cm フランス、個人蔵
©Archives photographiques Maket Expert

二番草とは、夏から初秋にかけて刈取られる牧草のことです。背景に連なる木々と、地面を斜めに横切る影が印象的な構図を作り出しています。マルタンの壁画にはしばしば類型化された人物像が繰り返し登場しますが、本作の黒いリボンの帽子の女性や、休息する人物像は、国務院の《農業》にも再び現れるモチーフです。

e. アンリ・マルタン

《農業[フランス国務院(パリ)の装飾画のための習作]》 広報用貸出画像 5

1918年 油彩/カンヴァス 62×205 cm フランス、個人蔵
©Archives photographiques Maket Expert

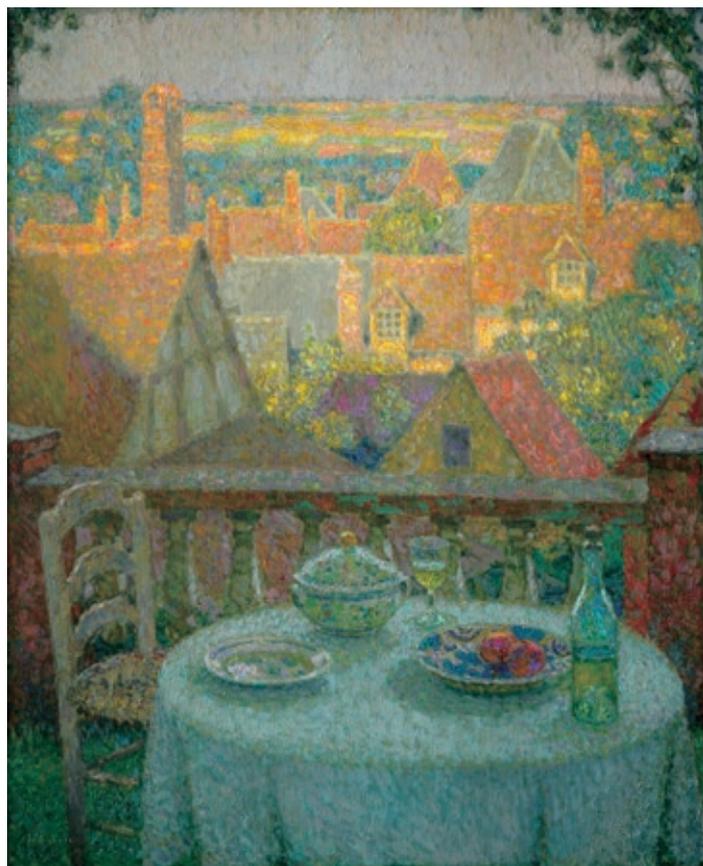
「労働」をテーマに描かれた4つの主題のうちのひとつ《農業》のための習作です。遠方にボブラ並木を望む、広大な小麦畑で農民たちが収穫をする情景は、農業国フランスの豊かさを示すものです。小刻みに震えているかのような変化に富んだタッチを用い、陽光に照らされた眩い光景が見事に捉えられています。

f. アンリ・ル・シダネル

《ジェルブロワ、テラスの食卓》 広報用貸出画像 6

1930年 油彩/カンヴァス 100×81 cm フランス、個人蔵 ©Luc Paris

庭のテラスからジェルブロワの村を見下ろす眺めです。連なる家々の屋根が黄色やオレンジなど温かみのある色彩で捉えられているのは対照的に、手前の食卓は寒色の色調の中に沈み、用意された食器やボトル、グラスは、その場にいるはずの人物の存在を暗示するのみです。シダネルは、整えられた食卓をテーマに130点近くを描き、今日でも最も人気の高い主題となっています。



f.

Colonne 2 バラの村、ジェルブロワ

ピカルディー地方を代表する「フランスの最も美しい村」として知られるジェルブロワ。人口100人ほどの小村が、別名「バラの村」と呼ばれるようになったのは、中世の要塞跡地として3世紀あまりの眠りについてきた村を発見し、自邸のみならず村全体をバラの花で彩ったシダネルの功績によるところが大きい。現在でも毎年6月に「バラ祭り」が開催されている。



Chapitre 6

ラバステイド・デュ・ヴェールの アンリ・マルタン

HENRI MARTIN A LABASTIDE DU VERT

シダネルがジェルブロワを見出したのと同じ頃、マルタンは南仏のラバステイド・デュ・ヴェールに別荘「マルケロール」を購入してアトリエを構えます。花に囲まれた池、葡萄の蔓棚、館を取り囲むテラスなど、絵の画題とすることを念頭に造られた庭は、画家の着想源であり続けました。これ以降、マルタンの画面から象徴性は影を潜め、代わりに池の縁に腰掛ける少女など、親密で身近な光景が描かれるようになります。



g.



Chapitre 7

ヴェルサイユの アンリ・ル・シダネル

HENRI LE SIDANER A VERSAILLES

1909年から晩年にかけて、シダネルは息子たちの教育のためにヴェルサイユに居を構えます。春から夏にかけて季節の良い時期はジェルブロワに滞在し、冬場はヴェルサイユで過ごしました。かつての王家の宮殿や庭はシダネルにとって格好の題材となり、第一次世界大戦のためにヴェルサイユにとどまった1912年の最初の作品群以降、「ヴェルサイユ」シリーズを描き続けます。壮大な宮殿や噴水は、散策するシダネルの眼を介すると、より素朴で身近な空間として立ち現れます。



h.

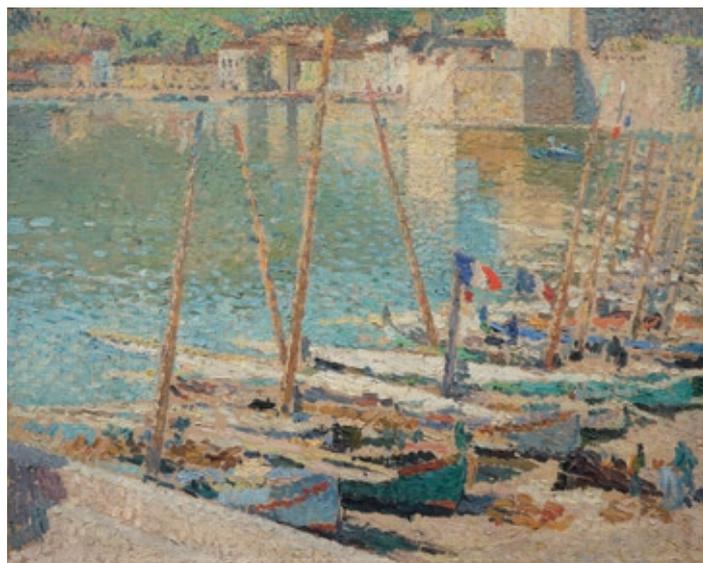


Chapitre 8

コリウールとサン・シル・ラポピーの アンリ・マルタン

HENRI MARTIN A COLLIOURE ET SAINT CIRQ LAPOPIE

「マルケロール」周辺の田舎風景を描いていたマルタンですが、後年になると異なる風景を求めて、さらに南へと足を伸ばします。1911年に近郊のサン・シル・ラポピーに家を購入すると、中世の街並みが残るこの村で、ロット川沿いの切り立つ断崖を繰り返し描きました。ついで1923年、コリウールに家を手に入れると、城塞に囲まれた入り江と緩やかな起伏を特徴とするこの港町を舞台に、マルタンは、漁師たちの活気と自然との理想的な対比を見出しました。コリウールの各所を捉えたこの時期の作品では、彩度の高い色彩によって、眩い陽光が見事に表現されています。



i.

g. アンリ・マルタン

《マルケロールの池》 広報用貸出画像7

1910-1920年頃 油彩/カンヴァス 81.5×100.5 cm
フランス、ピエール・バステイドウ・コレクション ©Galerie Alexis Pentcheff

「マルケロール」には大小3つの池があり、本作に描かれるのは、赤と白のゼラニウムに囲まれた一番大きな池です。池の縁にはローマ彫刻《子供とガチョウ》の複製も見えます。南仏の強い日差しの下、色鮮やかに描き出される庭の一角は、ここに暮らすマルタン一家の気配を感じさせず、独特の静けさをたたえています。

h. アンリ・ル・シダネル

《ヴェルサイユ、月夜》 広報用貸出画像8

1929年 油彩/カンヴァス 95×116 cm フランス、個人蔵 ©Yves Le Sidaner

宮殿の敷地の一角にある噴水を望む情景が、月明かりの中に描き出されています。月の光は空全体に広がる雲間に行き渡り、静まり返った夜のとばりを幻想的な雰囲気包み込んでいます。シダネル自身、「トリアンはお気に入りの『夢想場』」だと語っているように、ヴェルサイユは画家にとって身近な着想源であり続け、この地で120点ほどの油彩画を残しています。

i. アンリ・マルタン

《コリウール》 広報用貸出画像9

1923年 油彩/カンヴァス 65×81 cm フランス、個人蔵
©Archives photographiques Maket Expert

やや俯瞰して捉えた港には停泊する色とりどりの船が並び、右後景にはコリウール城の城塞がのぞいています。画家の関心は、マスト越しの水面にあるようで、南仏の陽光に輝く水面が軽快な点描で捉えられています。



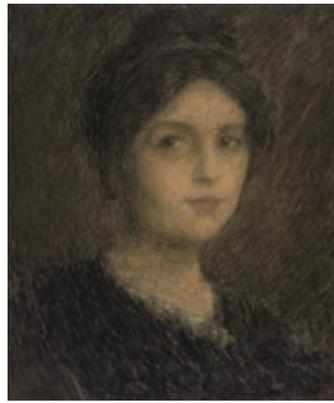
Chapitre

9

家族と友人の肖像

LES PORTRAITS DE FAMILLE ET AMIS

シダネルとマルタンは、身近な人物を愛情豊かな眼差しで描くことを得意としたことから、「アンティミスト(親密派)」の流れにも属しています。シダネルは世紀転換期以降、画中に人物を描かなくなりますが、家族や友人など身近な人々だけは好んで描きました。マルタンも、自邸の庭でまどろむ妻をモデルにするなど、私的な空間を描写するだけでなく、公共建築の壁画にシダネルをはじめとする友人や家族の肖像を描き込むことで、彼らに対する敬愛の念を示しました。こうした肖像画においても、風景画と同様、かすれた線と分離したタッチが効果的に用いられています。



j.

j. アンリ・シダネル

《カミーユ・シダネルの肖像》 広報用貸出画像 10

1904年 油彩、パステル、鉛筆/厚紙 46×38 cm フランス、個人蔵 ©Yves Le Sidaner

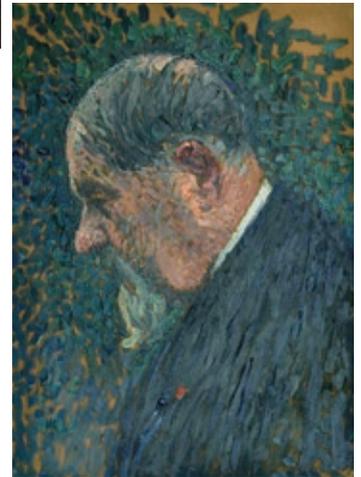
シダネルは家族や身近な人物を鉛筆などを用いた素描で描くことはありましたが、妻カミーユをモデルに描かれた本作では、珍しく油彩が用いられています。長く規則的な筆致は、茶褐色の色調の中にカミーユの穏やかな眼差しを浮かび上がらせ、ピンク色に色づく口元も印象的です。

k. アンリ・マルタン

《アンリ・シダネルの肖像 [カオールの《戦争記念碑》のための習作]》 広報用貸出画像 11

1931年頃 油彩/厚紙 46×33 cm フランス、個人蔵 ©Yves Le Sidaner

マルタン円熟期の壁画、カオール市庁舎のための《戦争記念碑》を準備するために描かれた部分習作です。完成作の壁画は、記念碑の前で黙祷する群衆を中心に構成されていますが、その中にはシダネルの他に、マルタン自身や家族、画家仲間、知人なども描き込まれています。



k.

✧ 関連地図 シダネルとマルタンの足跡 ✧





アンリ・マルタン
《二番草》

1910年 フランス、個人蔵
©Archives photographiques Maket Expert

展覧会名 シダネルとマルタン展 -最後の印象派、二大巨匠-

会期 2022年3月26日(土)～6月26日(日)

会場 SOMPO美術館
〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1

休館日 月曜日

開館時間 午前10時から午後6時(最終入館は午後5時30分まで)

観覧料 一般1,600円、大学生1,100円、高校生以下 無料

※チケットは公式電子チケット「アソビュー！」(日時指定券)、ローソンチケット、イープラス、
チケットぴあなどでお買い求めいただけます。詳細は美術館ホームページをご確認ください。

※身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳を提示のご本人とその介助者1名は無料
被爆者健康手帳を提示の方はご本人のみ無料

主催 SOMPO美術館、朝日新聞社

協賛 損保ジャパン

後援 在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本、新宿区

協力 日本航空

企画協力 プレントラスト

ホームページ <https://www.sompo-museum.org/>

お問合せ 050-5541-8600 (ハローダイヤル)

アクセス 新宿駅西口より徒歩5分



プレスお問い合わせ

シダネルとマルタン展 広報事務局 (ウイングダム内)

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-28-9 ヤマナシビル4階

TEL: 03-6661-9447 FAX: 03-3664-3833 MAIL: sompo-m-pr@windam.co.jp